

あそぶ・まなぶ・語る



周防大島町総合体育館陸上競技場 / 日本ハワイ移民資料館
八幡生涯学習のむら / 宮本常一記念館

第48号
2024年11月

宮本常一記念館 20周年記念講座

宮本常一記念館では周防大島出身の民俗

学研究者・宮本常一が遺した資料を保管し、
展示しています。当館は国や県の助成を受
けた「文化教育交流促進施設」として平成
16年5月に開館し、令和6年で20周年を迎



えました。このことを記念し、令和6年12
月7日に、「宮本常一記念館20周年記念講
座」を開催します。

講座当日は、リニューアルした展示室を
無料で開放します。この機会に、ぜひご来
館ください。

なお、展示室のリニューアルを行うため、
令和6年11月15日から12月6日まで宮本常
一記念館を休館いたします。利用者の皆様
にはご不便をおかけしますが、ご理解のほ

どよろしくお願い申し上げます。

【日時】12月7日（土） 13時半～15時半

【講座】

①森田朋有（公益財団法人日本離島セン
ター調査課長兼広報課長）

「宮本常一と日本離島センター」

宮本による離島の旅と振興、島の現状と
課題、日本離島センターの取り組み：など
②板垣優河（宮本常一記念館学芸員）

「宮本常一関係資料の研究と活用」

文書・蔵書・写真の魅力、リニューアル
した展示の見所、当館の活用方法：など

【会場】東和総合センター

※宮本常一記念館の東隣

【入場】無料 定員60名（先着順）

【問合せ】0820・78・2514



宮本常一記念館はもともと海があったところを埋立
て、建設された。上は昭和44（1969）年4月宮
本常一撮影。下は令和5年10月再撮影。

『文化と交流』No.8

文化と交流

No.8 / 2024年10月



■うたいつぎたいふるさとのうた、編んだいばらとのかげの心
～山は島内外のお年寄りを通じて～・・・成谷和郎（1）
■宮本常一の民具学・・・板垣優河（100）

宮本常一記念館

このたび、宮本常一記念館では機関紙『文
化と交流』No.8を発行しました。今号では
当館地域交流員の戎谷和修さんの特大エッ
セイ「うたいつぎたいふるさとのうた」伝
えたて郷土の旋律と心々山口県内外のお年
寄りを訪ねて」と、当館学芸員の論考「宮
本常一と民具学」を掲載しています。戎谷
さんは山口県内を中心に民謡の採集活動を
精力的に行い、また平成19年から現在にい
たるまで、中国新聞に「ふるさとのわらべ
唄」を640回以上にわたって連載されて
います。このエッセイでは、今となっては
調査が困難な伝承も数多く紹介されてお
り、大変興味深い内容となっています。『文
化と交流』は町内の図書館に置いておりま
すので、是非手にとってご覧ください。

（板垣優河）

周防大島町総合体育館

トレーニング
マシン紹介

ハイプーリー

これは、主に背中の筋肉を鍛えることができるマシンです。背中の筋肉を鍛えることで体幹が安定し、基礎代謝が上がります。太りにくく痩せやすい体質になります。体幹が安定するようになれば、高齢者の転倒予防につながります。もう一つの特徴は肩甲骨を大きく動かすことが出来ます。肩甲骨が動くようになると血行が良くなり肩こりの改善になり、また胸を張りやすくなるので猫背などの改善にもなります。

トレーニング室にはハイプーリー以外にも健康につながる器具があります。ぜひ当施設で、健康的なカラダを手に入れてください！皆様のご利用をお待ちしております。

【料金】1回220円（どのマシンも利用可）

【設備】●有酸素運動系…エアロバ

イク、ランニングマシン等

●筋力トレーニング系…チェストプレス、シヨルダープレス等

●ストレッチ系…ベルトマッサージ機、ストレッチマット等

そのほか血圧測定器、体脂肪計、無料ロッカールーム、シャワー（別途220円）があります。

※専門スタッフによる使い方のアドバイスも利用可（要予約）。

【時間】9時～21時（金・土・日・祝は17時まで）

※年末年始（12月29日～1月3日）及び臨時休館日を除く。

【問合せ】0820・78・2512

高齢者サロン開催
ところてん作り

八幡生涯学習のむら

学習のむらでは月に一回、高齢者サロンを開催しています。9月はところてん作りを行いました。ところ

てんは天草（てんぐさ）という海藻

を煮て煮汁を冷やし固めて作りま

す。ボランティアスタッフの協力で

しつかり煮たのでイソの香りがふわ

りと感じられるところてんができま

した。ところてんを細く切るために

は「ところてん突き」という道具を

使います。今ではあまり見ることの

ない道具ですが、「昔は台所にあっ

た」というお話を聞くことができました。

固まったところてんをとこ

てん突きに入る大きさに切って、突

いてみると——細く切れたところて

んが滝のように出てきました！見

るからに涼しげです。「味付けは酢

懐かしい料理や季節の行事を楽しむ

場、若いスタッフにとっては新鮮な

体験の場として少しずつ世代間の交

流も広がっています。（古賀瑞枝）

「印」作り講座



八幡生涯学習のむら

ご好評いただいている「印」作り講座。今年も開催を予定しています。

この講座では、自分の好きな文字や図案をデザインし、約3センチ四方の石材に転写した後、金属のヘラ

で少しずつ彫り進めていきます。石が柔らかいので、頑張れば持ち手の

部分を彫刻のように楽しむことも。

宮本常一や星野哲郎も蔵書印や座右の銘を刻んだ印を楽しんでいま

した。自分で作ったお気に入りの印と一緒に新年を迎えてみてはいかがでしょう。

【日程】12月14日（土）※予定

【時間】①10時～②13時半

【場所】語らいの間

【問合せ】0820・72・2601

牛とくらし 思い出の聞き取り



「これはヒコーキっていつて、牛にひかせてね。田んぼや畑を耕していた。しつかり地面に押さえつけるようにしとかないと浮き上がってうまく耕せないから、子どもの頃、重しがわりにこの上に座つとけてね。ガタガタするからしつかりつかまて…」



現代のような機械がなかった頃、牛は人とともに働くパートナーでした。昭和20年代末の久賀では農家戸数880戸、牛の飼育頭数466頭と約半数の農家が牛を飼っていました。しかし、現在では働く牛を飼っている家はないでしょう。久賀歴史民俗資料館では農機具や漁労具はじ

め様々な生活の道具を収蔵していますが、実際に使った方は少なくなっています。道具にまつわる思い出は、地域の暮らしや工夫を伝える貴重な証言です。(古賀瑞枝)

山口大学 マウロアプロジェクトチーム ハワイ移民資料館を分析

ハワイ移民資料館では、山口大学国際総合科学部に協力しており、このチームの皆さんは周防大島の活性化につながるよりよい資料館を目指した分析を続けています。先日、年度の折り返しとして学内及び資料館のスタッフに向けて行った中間発表会がありました。その内容の一部を本誌で次のとおり紹介します。

私たちは以下に示す3つの観点から資料館を分析しました。

① 運営体制

現在資料館には学芸員はいません。しかし、周防大島に強い想いを持つ6名のスタッフの方々が運営を行っています。スタッフの方々と来館者との間で距離の近い会話が自然

に生まれやすいことが魅力であると考えられます。その一方で今後も同じ熱量で運営していくためには資料館の運営を担う人材の育成などを考える必要があると言えます。

② 来館者

現在資料館には1日当たり平均12人が来館しており、国内のみならずハワイから来館している人も少なくありません。その目的は研究やルール探し、観光、学校の授業の一環など様々であるため、多様な需要を満たす充実した歴史の学び体験ができる場所になっていると分析しました。しかし、島内からの来館者も増やし、活用可能性を拡大する必要があると考えられます。

③ 展示

現在は五感を使って移民の歴史を学ぶことのできる資料を多数展示しています。それに加えて、資料館側が研究者に対して非常に協力的であり、必要に応じて解説を聴くこともできるため、かなりオープンな資料館になっていると言えます。しかし、幅広い層の来館者を獲得するために展示内容や展示方法を工夫する必要があると云えます。

これからは2月の最終発表会に向けて、先生方や資料館スタッフの方々から頂いた意見を基に資料館をより良くする具体的な方法を考え、実施していきます。



以上、学生の皆さんならではの視点、示唆に富む意見がありました。展示の入れ替えや人材育成などは直面している課題であり、予算的な問題もあります。一方でオープンな資料館と評していただき、島内からの来館者拡大など、今後目指す方向性を改めて示してくれたように思います。当館としても学生の皆さんの意見が反映できるようつとめたいと思うと同時に、分析が彼らの学びとなっていれば幸いです。(木元真琴)

評伝・宮本常一

第一回 生い立ち



宮本常一記念館は令和6年で20周年を迎えました。宮本は日本を代表する民俗学研究者として知られ、全国にファンがいます。今後は、周防大島町内をはじめ、もっと多くの方にファンになってもらい、当館の利用が促進されれば、と考えています。そこで、今号から宮本常一の評伝を複数回にわたって書くことにしました。宮本のことを知れば、同時に周防大島の歴史や文化、さらには島が抱えている課題も見えてくると思います。今回は宮本の生い立ちを中心に紹介します。

宮本は明治40（1907）年8月1日、父善十郎、母まちの長男として山口県大島郡の家室西方村長崎（現周防大島町）に生まれました。その日が旧暦で弘法大師の生れた日にあたることから、「えらい人間になるだろう」と噂され、「弘法大師のように常に何事にも一番であるように」との願いから「常一」と名付けられました。

宮本は特に祖父市五郎に可愛がれて育ちました。祖父の肩を夜ごと叩くのが幼い頃の日課で、それが終わると昔話や民謡を聞かせてもらっていました。宮本は『民俗学の旅』と



【宮本の家族】左から順に弟市太郎を抱く母まち、常一を抱く父善十郎、その手前は姉ユキ。右の5人は親戚。自宅にて明治43（1910）年頃に撮影。宮本千晴氏提供。

いう自叙伝のなかで「私が民俗学という学問に興味を持つようになったのは私の育った環境によるものであると思う。幼少のときから十六歳ま

で、百姓として生きてゆく技術と心得のようなものを祖父母や父母から、日常生活の中で教えられた。そしてその後の私の生活は幼少のときの親身の人たちから教えられたことの延長として存在しているように思う」と書いています。宮本の学問の形成は、幼い頃から始まっていたといえます。

ところで、周防大島は淡路島・小豆島に次いで瀬戸内海で3番目に大きな島です。18世紀の初め頃からサツマイモが作られるようになって人口が急増し、19世紀中頃には6万人に達しました。人口の増加率は水田を作っていた島の西部よりも、畑を多く作っていた島の東部の方が高く、100年ほどの間に3倍以上増加した地域もありました。しかし、6万人もの人びとが働けるほど、島には仕事があり余っているわけではありません。そこで船子や浜子、木挽、大工、石垣積みなどとして、島外へ稼ぎに出る者が増えました。

さらに、明治18（1885）年にハワイからの要請を受け、官約移民が成立すると、島の人びとは相次いでハワイへ渡航し、後にはアメリカ・

ブラジル・台湾・朝鮮・満州への渡航も盛んになります。宮本の父善十郎も若い頃、南太平洋のフィジー諸島に行き、帰郷後も農作業がひまになると、ふいに旅に出ることがありました。父に限らず、周防大島では旅をする者が少なくありませんでした。そして旅先で得た知識を島に持ち帰り、生活に役立てていました。宮本の郷里では、旅から旅を渡りある人びとを「世間師」と呼び、特に若い時に旅をして後に帰郷した者は、「あの人は世間師だから物知りだ」と周囲から評価されていました。後に「旅する巨人」ともいわれる宮本の学問には、そうした周防大島の風土が大きく関わっていたといえます。（板垣優河）



【宮本の生家】宮本が生まれた明治40年に養蚕に注力すべく、二階屋に改築した。昭和48（1973）年8月宮本常一撮影。